

名勝名古屋城二之丸庭園における擬岩・擬石の年代・分類・構造の整理

高橋 圭也

キーワード

タタキ（三和土） 擬岩 擬石 人造石

1. はじめに

名古屋城二之丸庭園（図1）は17世紀に徳川義直によって造られ、近世を通じて改修が繰り返されてきた。庭園の大部分は19世紀末頃までに陸軍によって破壊されたが、北池周辺は改修が繰り返し行われており、維持されていたことが発掘調査等で明らかになった。

二之丸庭園の特徴の1つにタタキを多用して庭園を構築している点を挙げることができる。二之丸庭園の現在地表に露出しているタタキ及び発掘調査で確認したタタキは16箇所（図2及び表1）で、名古屋城全体で確認しているタタキの45%にあたる。二之丸庭園のタタキは池周辺や井戸周辺などの水を使用する空間（図2及び表1 1、4、6、7、11、14、15）、園路や土間など硬い地面を必要とする空間（図2及び表1 2、3、5、8、9、10、12、13）に主に施工されている。これ以外に擬岩・擬石や擬木など庭園を装飾するためのタタキ（図2及び表1 1）を北池で確認することができる（図3）。

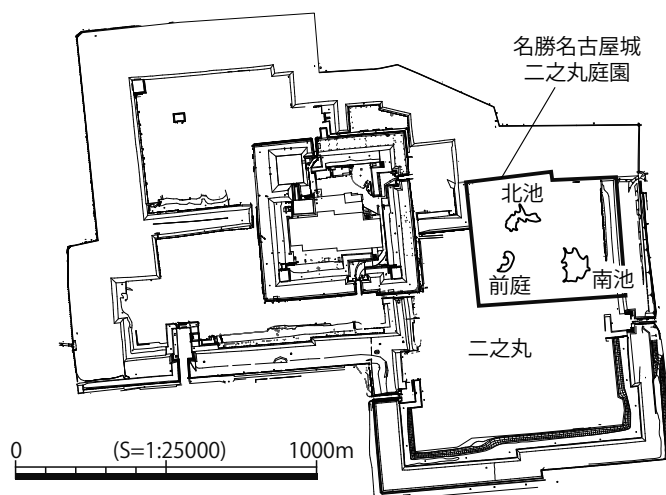


図1

二之丸庭園北池が持つ問題の一つに池内部にある庭園構成材の設置時期がわからないという点がある。17世紀から現在まで絶えず改修が行われてきたため、大半の箇所で土砂の堆積が存在しない。すなわち、層位から各構成材の設置時期を確認することが困難ということである。

擬岩・擬石は北池の中でも橋Aより西側に集中しており、北池東側は西側と比較して少なく7箇所を確認できる。擬岩の意匠は単一的ではなく、様々な意匠が存在する。

本論文では北池に存在する全ての擬岩・擬石を対象に意匠の分類を行い、意匠のモデルとなった岩石種の同定を行う。経年劣化によって破損した擬岩・擬石の断面や内部構造を観察して擬岩・擬石の構造について考察する。また、発掘調査等から明らかになった北池の変遷と、北池内の擬岩・擬石の分布、構造から擬岩・擬石の構築年代の比定を試みる。

2. タタキ、擬岩・擬石という用語について

タタキとは「砂、土、石灰、苦汁と水の5種類である。これらの任意の配合で組み合わせて混練してたたき上げ」た材（矢野耕也、矢野俊也 2011）、「石灰と適当な砂・粘土の3種類を混和するとされているが、マサがあれば、それと石灰のほかには必要としない。（中略）凝固促進剤として塩またはニガリを加えると、よく言われるが、これは必須のものではないようである。」（飯塚 1991）とあるように土と石灰を主な材料として叩き締めた硬化物である。なお、名古屋城の発掘調査で出土したタタキ状の硬化物のうち科学分析を行っている南池の池底、北池の池底及び護岸、擬木の⁽¹⁾一部が先述した先行研究⁽²⁾

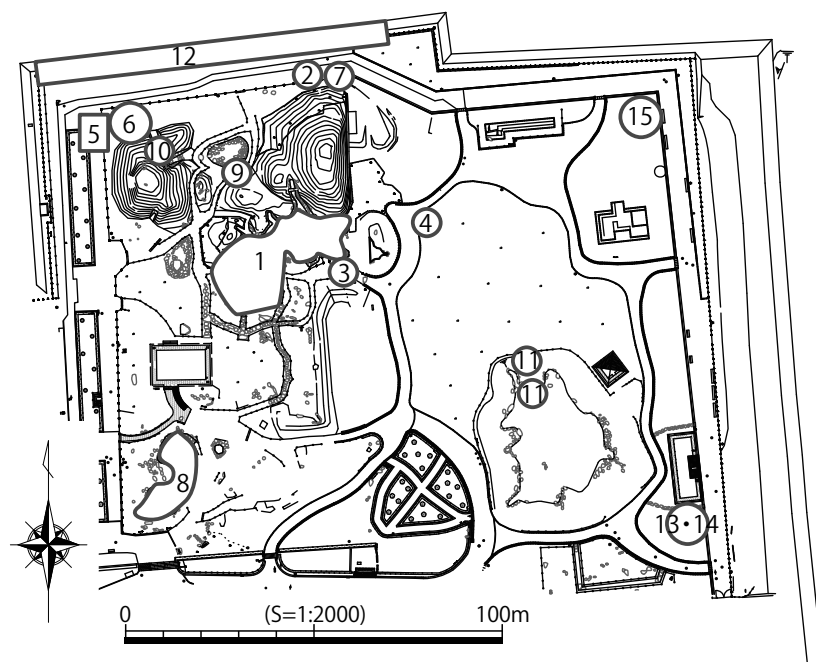


図2 二之丸庭園 出土タタキ位置図

表1 名古屋城二之丸庭園出土タタキ一覧表

No.	位置	時期	調査名	遺構名	遺構詳細
1	二之丸庭園 北池	近世・近代	二之丸庭園 第3次～第6次	北池	池底と池護岸がタタキで施工されている他、石や木を模した装飾品としての三和土が護岸上に多数確認
2	二之丸庭園北端	近世	二之丸庭園第4次	延段	花崗岩の切り石と扁平な自然石を並べ、周囲に三和土を敷き詰めている遺構
3	二之丸庭園 風信北側	近代	二之丸庭園第6次	園路痕A	延段片がまとまって出土
4	二之丸庭園権現山東	文政期(19世紀前)	二之丸庭園第2次	手水	石に囲まれた搦鉢状の「海」がタタキで施工されている
5	二之丸庭園 多春園	文政期(19世紀前)	二之丸庭園第2次、第3次	多春園	土間三和土
6	二之丸庭園 多春園東	文政期(19世紀前)	二之丸庭園第2次、第3次	池跡	
7	二之丸庭園権現山東	文政期(19世紀前)	二之丸庭園第2次	井戸	井戸
8	二之丸庭園 将校集会所前庭	1879年以降	二之丸庭園 第5次、第6次	枯池	池底全面が三和土。築山頂部にタタキが確認できる。
9	二之丸庭園 栄螺山東園路	近世か	二之丸庭園第5次		延段と推定している帯状の三和土
10	二之丸庭園 栄螺山北石組	近世か	二之丸庭園第4次		石組に接する三和土の小段
11	二之丸庭園南池	19世紀前～中	名古屋市土木局 二之丸庭園第7次	二之丸庭園南池	池底や池護岸の緩傾斜にタタキ
12	二之丸北側一帯	近世	二之丸庭園 第2次、第3次、第7次	土塀(南蛮練塀)	タタキで構築された塀
13	二之丸庭園南池東	1872年以降	二之丸庭園第8次	SB32	建物基礎
14	二之丸庭園南池東	1872年以降	二之丸庭園第8次	SD33	タタキ及び瓦敷の溝
15	二之丸北東角	近代	二之丸庭園第8次	タタキ面	凹凸のあるタタキ面

※遺構名と遺構詳細にあるタタキ(三和土)の表記は発掘調査報告書に合わせた

の定義に当てはまるタタキであるという結果が出ている。

擬岩・擬石とは漆喰、セメント、タタキといった素材を岩石に似せて成形した物体を指す。なお、擬岩・擬石の科学分析を行っていないため、構成する素材については不明である。しかし肉眼観察によって科学分析によって明らかになったタタキと石灰粒、骨材粒度、土色が類似していることからタタキと判断した。

一般的に素材を混合してすぐのタタキは水分の多い粘土のように柔らかく、任意の形状に成形することができる特徴を持つ。タタキは素材を混合して叩き締めることで数時間～数日間で凝固し、岩石のように固くなる。こうした特徴

を利用して岩や石に似せたと擬岩・擬石を構築している。

擬岩・擬石の他に擬木がある。素材は擬岩・擬石と同じで柔らかい状態のうちに木様に成形した構造物である。北池では丸太や柵を模した擬木を確認できる。

3. 擬岩・擬石の類例について

東京で1896年（明治29）に作庭された服部長七郎の屋上庭園で灯籠、手水鉢、飛石、沓脱石が人造石工法で作られていたと『東京市史稿（遊園編第七）』に記載されており、これが擬岩・擬石を庭園に使用した最古の記録である。⁽⁴⁾

人造石工法とは石灰と風化花崗岩粒などの種

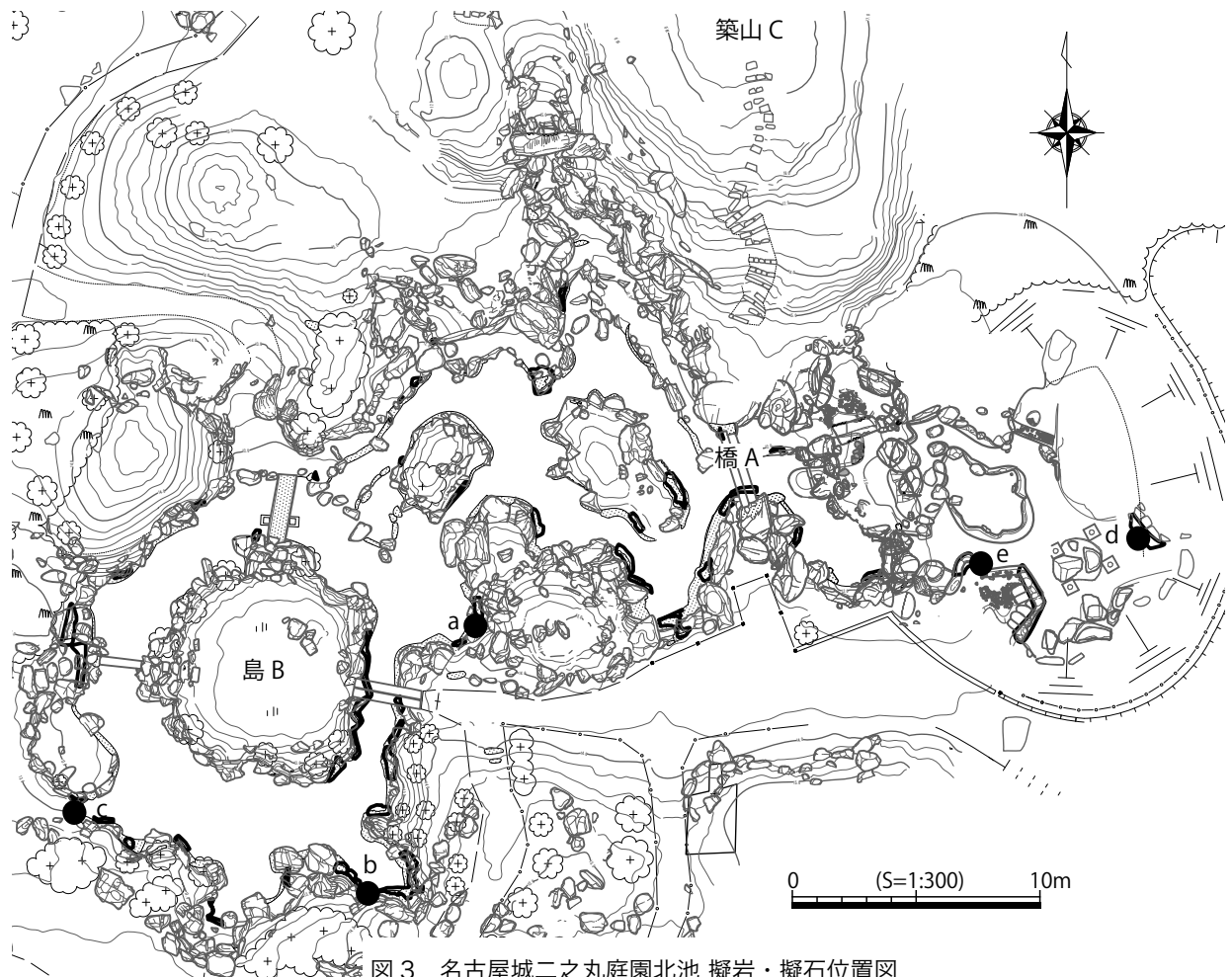


図3 名古屋城二之丸庭園北池 擬岩・擬石位置図

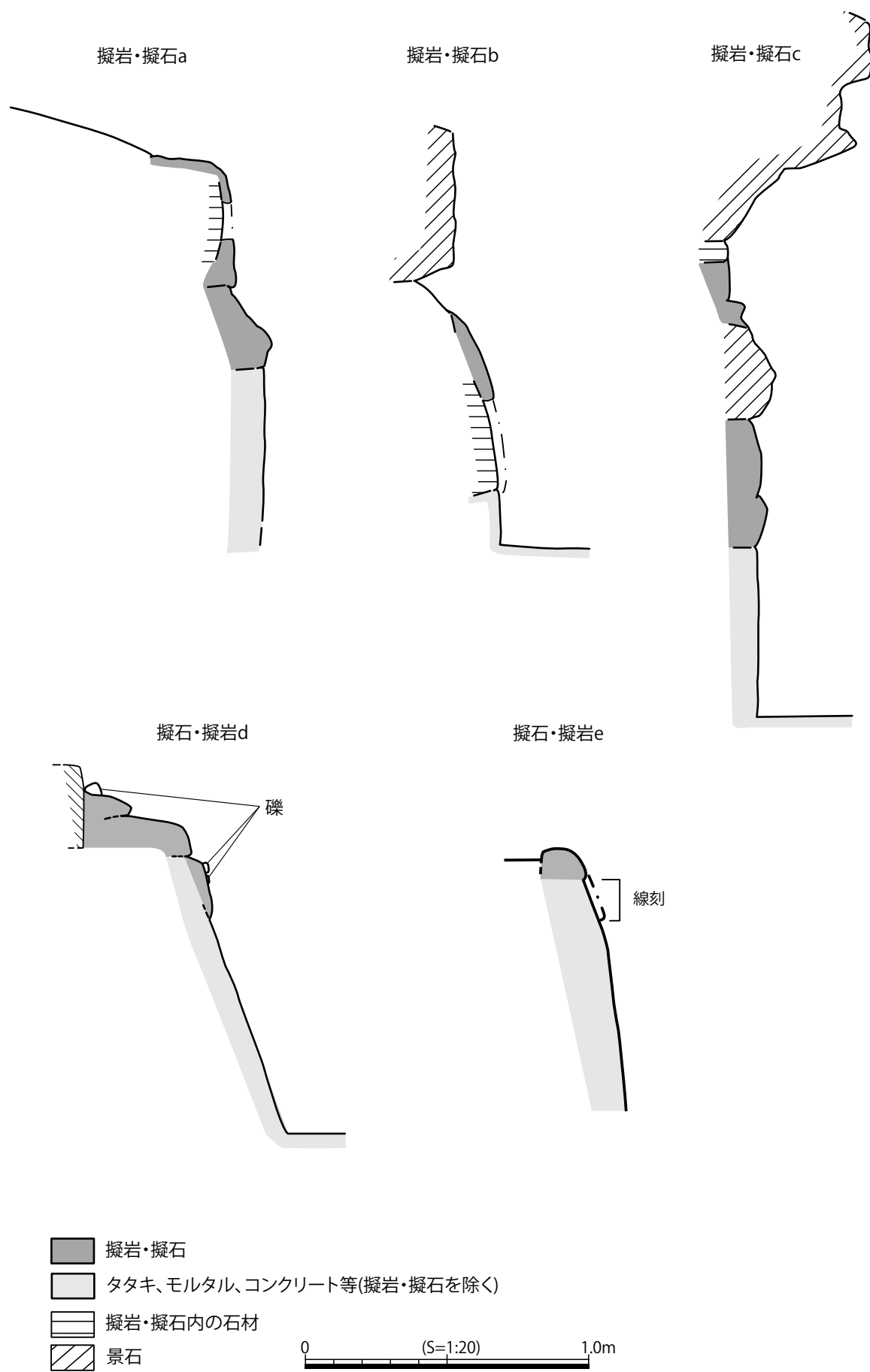


図4 擬石・擬石a～c断面図

土を混ぜて水を加えた「たたき」技法を土木工事に応用した工法を指す。⁽⁵⁾人造石工法には「①人造石材料だけで構築されたもの。②構造物の外側を自然石と人造石で張り内部は土砂を充填。③構造物の全部を人造石で形成しその外側を人造石で接合した石積みで保護する。」と3種類の工法がある。⁽⁵⁾服部長七は1878年（明治11）から人造石工法を用いて愛知県をはじめ全国で土木工事を行っていた。

その後、井下清や松村重が1926年（大正15）頃に井之頭恩賜公園、1928年（昭和3）に大塚公園にて擬木を使用した。1930年代に入ると擬岩・擬石（・擬木）が東京市内において流行する。⁽⁶⁾

関西では武庫離宮の庭園にて1913年（大正2）に青銅製の擬木が作られている。同じく武庫離宮の庭園にて1914年（大正3）に景石とモルタルを組み合わせ岩盤に似せた地形を造る「壮石」という技法が用いられている。⁽⁷⁾これらは本論における擬岩・擬石とは異なるが、岩石や木以外の素材を用いて景石や木を作る発想が存在していたことがわかる。その後、本論における擬岩・擬石（・擬木）は1926年（大正15）頃から関西で流行し、1930年代に天王寺公園などで大規模に使用されるようになる。⁽⁸⁾

擬岩・擬石を多用していることで知られる庭園に和歌山県の琴ノ浦温泉山荘園がある。琴ノ浦温泉山荘園では擬岩・擬石を池の護岸として主に使用している。擬岩・擬石は庭園主である新田長次郎が1912年（大正元）頃から自ら開発を開始し、1915年（大正4）頃までに擬木を、1920年（大正9）頃までに擬岩・擬石を導入したと考えられている。⁽⁹⁾

名古屋城周辺で類例を探すと名古屋市千種区に位置する揚輝荘庭園は1937年（昭和12）におおよそ完成しており、構築年代も1937年（昭和12）ごろとなる。

類例を総合すると擬岩・擬石の初出は1896年（明治29）であり、東京と関西で流行するのは大正年間である。名古屋ではやや遅れて揚輝荘庭園が1937年（昭和12）に擬岩・擬石を使用している。

4. 名勝名古屋城二之丸庭園の擬岩・擬石の分類

北池にある擬岩・擬石の意匠を確認すると5種類に分けることができた。

- ①縞状の模様を持つ擬岩・擬石（口絵12写真1）
- ②縞状の模様を持ち不規則に孔がつけられている擬岩・擬石（写真2）
- ③直径10cm以上の石粒を表面に張り付けている擬岩・擬石（写真3）・（写真4）
- ④不規則に孔がつけられている擬岩・擬石（写真5）
- ⑤30～50cm四方のコブが2つ以上集まった擬岩・擬石（写真6）
- ⑥その他。模様や張り付けられた石などがない擬岩・擬石。

これらの意匠のモデルとなった岩石種を二之丸庭園の景石から検討を行う。

①と②のモデルは佐久島石と呼ばれる泥岩～砂岩が互層になった堆積岩と考えられる（写真6～7）。②にある孔は穿孔貝によって開けられた孔や海蝕された様子を再現していると考えられる。佐久島石は愛知県西尾市の沖合に浮かぶ佐久島で採れる石である。『岷山日記』に佐久島から「庭石」を運んだという記録がある。⁽¹⁰⁾佐久島石は①のように数cm単位で泥岩と砂岩が互層に堆積している石や②のように数cm単位で泥岩と砂岩が互層に堆積した後に穿孔貝や海蝕によって孔がつけられた（タフォニ）石がある。

③のモデルはさざれ石と呼ばれる角礫岩と考えられる。さざれ石は二之丸庭園では主に近代

に構築された前庭周辺(現在の二之丸茶庭周辺)と南池に配置されている。北池では確認できなかった。採石地は不明で、採石や運搬に関する記録は確認できなかった。さざれ石は複数の角礫が圧力を受けて凝結し1つになった岩石である。タタキ等の素材が凝固する前に礫を差し込んでさざれ石様の擬岩・擬石を製作したと考えられる。

④のモデルは不規則に開けられた孔からタフォニがある石と考えられる。孔は③に張りつけられている礫と同サイズで、張りつけられた礫が経年劣化により抜け落ちた際の孔との区別が難しい。二之丸庭園内でタフォニを持つ石は佐久島石しか確認できないため、佐久島石をモチーフにしていると考えられる。しかし実際の佐久島石の多くは層状の筋が入っており、別の石材をモデルにしている可能性も排除できない。

⑤のモデルは不明である。類似する岩石に佐久島には波の浸食を受けて表面がコブのような凹凸を持つ岩石が存在するが、同様の石を二之丸庭園で確認することはできなかった。

5. 名勝名古屋城二之丸庭園の擬岩・擬石の構造

北池に存在する擬岩・擬石は割れや欠けが少なく、池護岸や池底と比較すると良好な状態を保っている。その中でも割れ面から内部構造を確認できる擬岩・擬石は擬岩・擬石 a～e の5石(図3)である。

a は全体に直径1～5cmの孔が不規則に開けられている。孔は穿孔貝による掘削をイメージしていると考えられ、③に分類できる。擬岩・擬石の中央が割れて内部から美濃帯の砂岩が露出している。擬岩・擬石は砂岩をコアとして、その周囲に2cmの厚さで砂岩に張り付いている。

b は a と同様に穿孔貝によって開けられた孔

をイメージしたと考えられる直径1～5cmの孔が不規則に開けられており、④に分類できる。擬岩・擬石の上部が割れて内部からチャートが露出している。擬岩・擬石はチャートをコアとして、その周囲に1cmの厚さでチャートに張り付いている。

c (写真7)のモチーフは不明である。暫定的に⑤に分類した。c 周辺には花崗岩類の景石が多く配置されており、c は花崗岩類をイメージした可能性がある。擬岩・擬石の下部が割れて内部から美濃帯の砂岩が露出している。砂岩は池護岸を削って設置されている。砂岩に隣接して西に別の擬岩・擬石、東に擬木が設置されている。擬岩・擬石は砂岩をコアとして、その周囲に1～5cmの厚さで砂岩に張り付いている。

d (写真8)は擬岩・擬石に直径5～20cmの黄褐色のチャートを全体に張り付けており、③に分類できる。破損している箇所を観察すると複数のタタキ塊が集合して構成されていることが確認できた。d は護岸上にいくつかのタタキ塊を施工して、タタキ塊が完全に硬化しないうちにチャートを貼り付け、厚さ5～10cmの表面部分を構築したと考えられる。

e はモチーフ不明である。a～cと異なり、コアが確認できない。護岸に直接擬岩・擬石を貼り付けて構築している。擬岩・擬石が剥離している箇所を観察すると護岸にカキメのような線刻が不規則に20条刻まれている(写真6中央部)。擬岩・擬石の設置面を増やし剥がれにくくするための調整方法と考えられる。

a～cに共通することとして基礎となる岩石の存在がある。岩石を覆うように構築されていた。基礎となる岩石はチャートと砂岩であり、岩石種に傾向は見られなかった。

名古屋城以外では琴ノ浦温山荘園で擬岩・擬石の内部構造を確認することができた。琴ノ浦

温山荘園は東池西～北の擬岩・擬石によって構築されている。擬岩・擬石は青く着色され、一定方向に筋が入っている。また、白い筋が数条入っている。こうした意匠は結晶片岩をイメージしていると考えられ、白い筋は貫入を表現していると考えられる。擬岩・擬石は経年劣化により割れている箇所が多く存在する。破面を観察すると内部に結晶片岩が設置されていることが確認できた。名古屋城のa～dと同じ擬岩・擬石の内部に石材のコアを持つ構造である。結晶片岩を基礎にして結晶片岩をイメージした擬岩・擬石を構築している⁽¹¹⁾。琴ノ浦温山荘園の擬岩・擬石は手に入らない石材の代用品ではないということがわかる。

二之丸庭園北池の擬岩・擬石は佐久島石とさざれ石をイメージし、コアとなる材は美濃帯の砂岩、チャート、タタキである。庭園内には佐久島石とさざれ石が配石されているため、琴ノ浦温山荘園のようにあえて擬岩・擬石化させたのか、佐久島石とさざれ石が擬岩構築時期に入手できなかったのか。現状では判断できず、今後も検討が必要である。

6. 名勝名古屋城二之丸庭園の擬岩・擬石の年代

擬岩・擬石は二之丸庭園北池の全域に分布している。北池の範囲の変遷と構造ごとの擬岩・擬石を整理することで擬岩・擬石の構築年代を推測することができる。

北池の変遷 北池は「中御座之間北御庭惣絵」や『金城温古録』から17世紀初から存在したと考えられている。庭園の様式的には室町時代末期のようであるため、那古野城期（16世紀）から存在していたという説もある⁽¹²⁾。具体的な池の形状の変化は不明であるが、18世紀中～19世紀初にかけて改修が行われ、現在の形状となった。近代に入ると二之丸には陸軍の兵舎が構築される。兵舎は1873年（明治6）に二之

丸の南側に、1876年（明治9）以降に二之丸の北側に建設された⁽¹³⁾。二之丸の北側に建てられた兵舎は南池と北池の東側と重なっていることから、この兵舎構築以前に南池と北池東側は廃絶していたと考えるのが妥当である。北池東側は1975年の名古屋市土木局による発掘で確認され、その後の名古屋城総合事務所による発掘調査と整備ですべての覆土が取り除かれたため、現在は地表に露出している。

擬岩・擬石のうちで北池東側に分布する一群（以下、東側とする）は埋没する前に構築されたと考えられる（図3の橋Aより東側がおおよそ1975年〔土木局による発掘の直前〕まで埋没していた箇所）。

近代以降の記録に現れる庭園改修のうち、擬岩・擬石の時期を推定できる記録として1879年（明治12）の吉田紹和と庭師大島嘉吉による修理が挙げられる。このときに池底の修復も行ったと言われており、池底のタタキと同じ材料を用いて構築する擬岩・擬石もこの時に構築した可能性がある。北池東側の埋没年代を『歩兵第六聯隊歴史』を参考にするとこの改修は庭園東側のみとなる。『陸軍大日記』を参考にすると北池東側は埋没していない。しかし兵舎の増築は1877年（明治10）に発生した西南戦争に伴うものであり、1877年時点で北池東側の廃絶が決定されていたと考えられるため、吉田と大島の修理は東側に及んでいない可能性が高い。

次に記録に残る庭園見学の履歴を見ていく。陸軍は修学旅行生や兵隊の家族を対象に二之丸を開放しており⁽¹⁷⁾、軍関係者以外が庭園を観覧できる環境にあった。1932年（昭和7）に狩野力⁽¹⁸⁾が、重森三玲が『日本庭園史図鑑 桃山時代1』出版（1938年）以前に二之丸庭園を踏査している。どちらも北池東側埋没後に見学している。両者ともに北池を桃山末期の様式を残す庭園と

評価し、庭園の中から桃山末期の様式を探し出すことに注力しており、近代の改修については評価の対象外であったと考えられる。重森三玲に至っては近代の改修を「改悪」と評価している。なお、擬岩・擬石について書かれた文言は見当たらない。

当時（1932年）の北池の状況は、狩野力によると1891年（明治24）に発生した濃尾震災の影響で「園内庭石の轉落」や「池底のたゞきに大龜裂」を確認している。すなわち1891（明治24）～1932年（昭和7）まで北池は放置されていたと考えられる。その後踏査を行った重森三玲は北池について「現状では甚だしく荒廢⁽¹⁹⁾」しているが、「現状では水上高さ八尺を有し」と水面の存在が確認できることから、池底に関しては重森三玲による踏査までに修復されていたと考えられる。重森三玲のよる踏査から数年後に日中戦争が始まり、1945年（昭和20）に陸軍が解体される。二之丸庭園はその後名古屋大学、名古屋市と所有が変わるが、この間に北池を含む庭園の修復した記録はない。

擬岩・擬石の構造ごとの分布 破損箇所から構造が確認できる擬岩・擬石はa～eの5箇所である。a～cは池の西側、すなわち兵舎構築によって埋没せずに構築以来地表に露出し続けているエリアに位置している。d～eは池の東側、すなわち兵舎構築後（遅くとも1882年）に埋没したエリアに位置している。5で整理したようにa～cはコアに石材を用いて、d～eはコアを持たないという差異がある。また、東側の擬岩・擬石は厚さが20cm程度であり、西側と比較して薄く、コアを入れる余地がないようにみえる。

兵舎構築前（遅くとも1882年）に構築された擬岩・擬石はコアを用いないと推測できる。ただし5箇所のサンプルと擬岩・擬石の厚みという少ない情報での推測であることは考慮しな

ければならない。

擬岩・擬石のモデルの分布 池の西側で確認でき、東側確認できないモデル分類は縞状の模様を持つ①と②である。逆に池の東側で確認でき、西側確認できないモデル分類は存在しない。

①と②以外は全体に分布している。さらに③の表面に張り付けられた石に注目すると池の東側では黄褐色のチャート（写真3）を貼り付けているのに対して、池の西側では灰褐色、灰色、青灰色などの様々な色で構成されており（写真4）、色による選別を行っていないと考えられる。二之丸庭園に設置されている角礫岩を確認すると、近代の早い段階に埋没した南池内に黄褐色の角礫を含む角礫岩が多く分布しており、近代に整備された前庭周辺に灰褐色、灰色、青灰色などの様々な色の角礫を含む角礫岩が分布している。前庭周辺に黄褐色の角礫を含む角礫岩は存在しない。⁽²⁰⁾

黄褐色の角礫を含む角礫岩をモチーフにした擬岩・擬石（北池東側の擬岩・擬石）は南池埋没以前に構築され、多様な包有物を含む角礫岩をモチーフにした擬岩・擬石（北池西側の擬岩・擬石）は南池埋没後に構築されたと推測できる。さらに言うと多様な包有物を含む角礫岩をモチーフにした擬岩・擬石（北池西側の擬岩・擬石）は前庭構築後に構築されたと考えられる。

7. 総括

名古屋城二之丸庭園の擬岩・擬石を形態から5つに分類することができた。その中で張り付けられた礫や孔、縞模様から佐久島石と角礫岩（さざれ石）をモデルとした擬岩・擬石があると推測できた。

北池はある程度変遷を確認することができる。北池の変遷と擬岩・擬石の構造がある程度一致することから、北池東側は兵舎構築（遅くとも1882年）以前に製作され、西側はそれ以

降に製作された可能性を提示することができた。さらに言うと北池西側の擬岩・擬石のうち、③についてはモチーフとした角礫岩から前庭構築以後に製作されたと考えられる。北池東側については構築が1882年（明治15）以前であるため、東京や関西の類例からかなり先行して擬岩・擬石を製作したことになる。

ただし北池西側は北池構築以来、常に地表に露出し続けているため、兵舎構築（遅くとも1882年）以前に製作された擬岩・擬石が混ざっている可能性があることは考慮しなければならない。すなわち北池西側は兵舎構築以前に北池東側と同時期に構築された擬岩・擬石に加えて、1879年（明治12）以降に構築された擬岩・擬石が存在すると考えられる。また、他庭園の類例を見ると西側でのみ確認できるコアに石材を用いる構造は琴ノ浦温山荘園の擬岩・擬石と同じ構造である。琴ノ浦温山荘園は1920年（大正9）頃までに構築されており、北池西側もそのころの構築である可能性が考えられる。

以上のように北池東側の擬岩・擬石の設置時期をある程度明らかにすることができたが、北池西側については構造や類例からの予想にとどまらざるを得なかった。しかし近年、評価が進みつつある景石や北池修復時に行う立会調査による護岸の背面土観察など、調査の蓄積が進めば、擬岩・擬石についても再検討できるだろう。

註

- (1) 名古屋城調査研究センター 2023『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 第7次・第8次』
- (2) 名古屋城総合事務所 2017『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 第1次～第3次』池底
- (3) (2)と(3)で二之丸庭園の池底や池護岸でタタキ（三和土）の出土例を報告している他に、名古屋城三之丸遺跡の御屋形庭園（愛知県埋蔵文化財センター 2005『名古屋城三之丸遺跡7』）池護岸及び池底で「漆喰」、江戸

の尾張藩上屋敷（東京都埋蔵文化財センター 1996～2020『尾張藩上屋敷跡遺跡1～11』）では水槽に「漆喰」が確認されている。また、彦根城の園池などでタタキが確認されている。二之丸庭園のタタキ（三和土）は近世における止水方法の一つと理解できる。

- (4) 近藤三雄 2009「我が国における屋上庭園の起源と黎明期における展開について」『造園技術報告書集（ランドスケープ研究増刊）』
- (5) 飯塚一雄 1986「人造石（たたき）工法による明治期土木構造物」『日本の産業遺産—産業考古学』、石田正治 1991「人造石工法「たたき」の遺産の調査とその保存」『土木研究 第11号』
- (6) 栗野隆 2015「近代東京における擬木擬石づくりの名手、松村重の足跡」『ランドスケープ研究 78巻』
- (7) 西桂 2011「武庫離宮の庭苑遺構についての考察」『日本庭園学会誌 24』
- (8) 栗野隆 2011「近代の大阪および阪神間を中心とした擬木・擬石・擬岩の導入と展開」『ランドスケープ研究 74巻』
- (9) 栗野隆 2009「擬石・擬木の造園的利用の系譜からみた琴ノ浦温山荘園の造園史的位置づけについて」『ランドスケープ研究 72巻』
奈良文化財研究所 2009『琴ノ浦温山荘園庭園調査報告書』
- (10) 南知多町 1991『南知多町誌』
- (11) 『琴ノ浦温山荘園庭園調査報告書』の「第4章 特論」にてセメントモルタルを重ね塗りした二重構造としているが、筆者が現地で観察した限りではセメントモルタルを重ね塗りした二重構造となっている擬岩・擬石の他に石を覆うようにセメントモルタルを塗った擬岩・擬石を確認した。
- (12) 重森三玲 1938『日本庭園史図鑑 桃山時代1』
- (13) 『歩兵第六聯隊歴史』には「明治9年に（中略）建築されること、なつた」と記載されている。しかし『陸軍大日記』には明治9年に二之丸北側で建物を構築した記録がない。明治9年以降の二之丸の状況を『陸軍大日記』で確認すると明治13年～15年にかけて建物の建築を示唆する文書が頻出しており、二之丸北側の兵舎は明治13年～15年ごろに建築されたと推測できる。

- (14) 名古屋城調査研究センター 2023『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 第7次・第8次』
- (15) 名古屋市土木局 1975『名城公園旧二之丸庭園試掘および調査報告書』
- (16) 重森三玲 1938『日本庭園史図鑑 桃山時代 1』
- (17) 歩六史編集委員会 1968『歩兵第六聯隊歴史』
- (18) 狩野力 1933「名古屋城二之丸御庭に就て」『庭園学会雑誌 4 巻』
- (19) 『日本庭園史図鑑 桃山時代 1』に挿入されている島 B を移した写真を見ると「荒廢」というよりよく整備されているようにも見える。また、1876 年（明治 9）頃に東斜面を削られた築山について「荒廢しつゝもよく保存される」と評価している。このことから重森の「荒廢」という評価が曖昧であるといえる。
- (20) 重森によると進捗集会所に伴う前庭は 1879 年に吉田・大島による作庭としている。

《Title》

A research summary of an archaeological and structural classification of fake rocks and stones at the Ninomaru Garden in Nagoya Castle

《Keyword》

fake rocks, fake stones